

やまなし文学賞青少年部門佳作

可惜夜の向こう側 林翔太 作

「——今こそ、皆さんの夢に向かって邁進まいしんする時です。では、また休み明けに」

やけに熱のこもった教師の声が消えて、喧しい蝉せみの音だけが響いた。茹うだるような夏の暑さに、俺は辟易へきえきとした。

「やけに嫌そうな顔だね、君。これから夏休みの幕開けだって言うのに」

「生憎あいにくだが俺は暑いのが苦手なんだ。夏休みは毎日引きこもる予定でね」

「うんうん、実に私のイメージ通りだ。イメージ通り過ぎてつまらないぐらいにはね」
そうだと思つた、という具合に彼女は頷うなずいてみせる。そのわざとらしい仕草しぐさが、少し滑稽しやくげきに感じた。

「でも、引きこもつてばかりじゃ体に毒だろう？ 私が強制的に連れ出してあげようじゃないか」

思い出したように彼女は言う。にやりと笑う彼女の瞳が、獲物を狙う蛇のように鋭く輝いた。

「それはありがたい話だな。遠慮しておこう」

「君ならそう言うと思つたよ」と、彼女は浅く嘆息を漏らす。

「でも、こつちとしても付き合ってもらわないと困るのさ。この夏、私には目的があるからね」

「目的？」

「そう、目的」

「…まあ、聞くだけ聞いてやろう」

ふふ、と得意そうに彼女は笑う。少し興味を持ってしまった自分の心を見透かされたようで、なんだかきまりが悪かった。

彼女の言う目的とはなんなのだろうか。時計の針が刻む音に合わせて、俺の心の波は大きくなつていった。

それから数秒後。深く息を吸って、彼女は言った。

「——『海月の骨』を、見つけに行くのさ」

彼女の言葉を反芻しながら、俺はベッドに臥していた。海月の骨。クラゲの、骨。そもそも、クラゲという生き物に骨はない。彼らは体の九割以上が水で構成されている。骨が入る隙間など、どこにもないわけだ。あの時だって、俺はそう反論した。

「君、文芸部だろう？ そんなことも知らないなら、まずは図書館に行くところから始めなければならぬね」

やれやれ、といった感じで彼女は呆れていた。抵抗する間もなく、俺は彼女の提案を呑むしかなくなってしまった。

「三日だ。三日間は私に付き合ってもらおう」

彼女はそう言って、まっすぐ俺の眼を見つめていた。彼女の瞳は、吸い込まれそうなほどに真黒で、ただひたすらに澄んでいた。

かくして、俺の三日間は始まった。高校二年の夏。『海月の骨』を探す少年少女の、ささやかな冒険の話だ。

「海月の骨、海月の骨——これか」

『海月の骨』あるはずのないもの。また、ありえないことやめつたにないことのとえ。』

「ようやく見つけたのかい、君」

向かいの席に座った彼女が、小声で話しかけてくる。彼女の提案の翌日、俺たちは学校の図書館にやってきていた。

「遅くて悪かったな。あんたの言うことはいつも文学的すぎるんだよ」

「仕方ないだろう。それが私を構成しているのだから」

「あんた、たしか美術部だったよな？ 文芸部の間違いじゃないよな？」

「間違っていないね、何も」

「じゃあなんでそんなに文学的なんだよ…」

溜息ためいきにも近いすぐ消え入るような疑問を吐き出したあと、彼女は少し口を噤つぶんだ。

「……そんなことは、どうだっていいのさ」

彼女の目が少しだけ泳いだ。どうにも触れちゃいけないような話題な気がして、俺も黙りこくってしまった。

しばらく、辺りに静寂が広がった。俺たち以外に、三人ほど生徒がいた。彼らに迷惑だとは分かっていたが、それよりも彼女との間に広がるぎこちない空気が嫌だった。最小限の音量に調節しながら、俺は口を開いた。

「これ、出典は枕草子なんだな。あんた、古典文学にまで詳しいのか」

「……たまたまだよ」

「たまたま。本当に？」

「本当さ。たまたま知ってたただけだよ」

「…そうか」

特に話が弾むわけでもなく、会話は途切れた。沈鬱ちんうつとした空気が、俺たちの周りを満たす。ふと時計の針に目をやると、午後二時を指していた。それからは静かだった。何の会話もないまま、俺たちはずっと、読書に耽ふけっていた。元来、読書は独りで嗜たしなむものだ。二人が同じ空間で全く別の本を読んでも意味がないのに、なんだか一緒にいるというのはそこまで悪い気分ではなかった。俺たちの間に漂う重い空気とは対照に、時間は足音を立ててひよいと進んでいった。

「さて。明日は海へ行くでしょうか」

図書館からの帰り道、彼女はそう言った。少し、日差しが和らいだ時のことだ。

「海？ そりゃまたなんで」

「だって、海には海月がいるだろう」

当然のように彼女が言うから、俺は少しおかしく思えてしまった。

「なんで笑うのさ。事実だろう？」

「いや、そりゃそうなんだけどさ。もちろん海には海月がいるよ。でも、あんたの探してる『海月の骨』はそこにないだろう」

「そんなの、行ってみないと分からないじゃないか」と、彼女は小さく頬を膨らませた。

「分かった分かった。ごめんって。ついていくよ。三日間は確約しちゃったからな」

「話分かるじゃないか。そういうとこ、実に好ましいね」

「冗談はよせ。うわべだけの言葉にしか聞こえないぞ、それ」

「これは手厳しい。そんなつもりないんだけどなあ」

「よく言うよ」

軽口を叩きながら、俺たちは歩いた。毎日引きこもる予定だった夏休みが、少し色づいたように感じた。

「———そういえば」

ふと、あることが気になった。

「さっき、何の本読んでたんだ？」

「星の王子さま」

「サンIIテグジュペリか」

「そうそう。小さい頃から何回も読み直しててね」

「好きなんだな」

「好きというか、救われるのさ」

「救われる、とは」

少し考え込む仕草をした後、彼女は口を開いた。

「大切なことは目に見えないらしいが、君はどう思う」

「どう思うって言ったって、なあ。人それぞれ、なんじゃないのか」

「そういう普遍的な回答を期待しているわけじゃないのは分かるだろう。君の考えが聞きたいんだ。君がどう思うか。君がどう感じるか。君が、どう解釈するか」

自分自身の考え。彼女に言われてから、俺は黙りこくってしまった。考え込んで、考え込んで、それまた考え込んで、すぐに言葉は紡げなかった。

「———私ほね」

遠くの空をぼうつと見つめながら、彼女は語りだした。

「大切なことは、目に見えないでいてほしいんだ」

「…それ、質問の答えになってるのか？」

「さあね。でも、私はずっと願いつづけているのさ。大切なことは目に見えないままであってほしい。それは私の願望であり、理想だ」

哀しい横顔だった。空を見つめる彼女の瞳は、光を失って虚ろであるように見えた。かける言葉が分からなかった。ないのではなく、俺には見つからなかった。ただの直感だった、そう思った。

「：なあ、本当に救われているのか、あんた」

「もちろんさ。私の理想を肯定してくれているわけだからね」

そんなわけない。そういうわけじゃない。根拠はなかった。でも、そう思った。胸の奥に、何かざわつくものを、確かに感じた。

「話が変わるけど、明日の海ね。電車に揺られながら行くのが良いと思ってるんだけど、君はどうだい」

「：分かった。時間はどうするんだ」

「ああ、そのことなんだけど——」

電車は緩やかに揺れながら、俺たちを運んで行った。心地良い振動と、車輪の響きを感じる。電車自体が鼓動しているような、寝息を立てているような、俺はそんな錯覚に陥った。

電車を乗り継ぎながら三時間。そこから大体十分ほど歩いたところに、海は広がっていた。潮の匂いがした。水平線が見えた。赤黒い、夕日が見えた。

「：そりゃ、わざわざ夕方に海に行く奴らは少ないよな」

辺りを見回すと、砂浜に佇む人間がぼつぼつと見えたが、その数は寂しいものだった。

「うん、いいね。夕日がすごく綺麗だ。わざわざ夕方にした甲斐があった」

どうせなら海に行くのは夕方がいい。私は夕日が見たい。そんな突飛な提案をしたのは彼女だった。

「たしかに夕日は綺麗だ。一考の余地があるぐらいには綺麗だと俺も思うよ。だけど、帰りはどうするんだ。これ、帰る頃には本当に真っ暗だぞ。あんた、親が心配しないのか」

「大丈夫。私の家は放任主義なのさ」

「とは言ってもなあ……」

「そんなに心配してくれるのなら、君が守ってくれたまえよ」

「嫌だよ、めんどくさい。あんたに何かあったら責任を負わされるのは俺だろう。そこに困ってるんだ」

「実に薄情な奴だね、君は。もう少し私を大切にしてくれてもいいんじゃないかな」

そう言つて彼女は、冷めた視線を俺に突き刺した。

「悪かったよ。夕日でも見て機嫌直してくれ」

「フォローが雑すぎるよ、君。まあ、いいけどさ」

俺たちは夕日を眺めながら、一歩ずつ海岸線に近づいた。寄せては返す波の音が、不思議と心地良く感じた。

「——あ、いた」

そう呟いたのは彼女だった。何のことかと思ひ彼女の視線を追うと、そこに揺蕩つていたのは、二匹の海月だった。

「多分、ミズクラゲだね」

大きい海月と、小さい海月の二匹だった。互いに身を寄せ合い、ぶかぶかと揺蕩っているように見えた。

「で、どうだった。『海月の骨』は」

「もちろん、ないさ」

「だろうな」

彼女はただ静かに、穏やかに、海月たちを見つめている。

「——君には、夢があるかい」

彼女は、徐おもむろにそう言った。

「夢、か」

「そう。夢。君は夢を持っているのかな」

夢。自分の夢。将来の夢。あまりに大きすぎる不透明な未来の話。その質量に押し潰つぶされそうな気がして、答えられなかった。

「：私はね、小説家になりたかったんだ。それも普通の小説家じゃない。父みたいな小説家に、なりたかったのさ」

俺はただ、彼女の話に耳を傾けた。二匹の海月は、まだそこにいた。

「父は、文学を心から好んでいた。父がする話は全て文学の話だったし、私はそれを聞くのを楽しみにしていた。星の王子さま。老人と海。よだかの星。夏目漱石に、宮沢賢治。太宰治の話がされたこともあった。私はそれが、楽しくて仕方なかったのさ」

大きい海月が、水面を揺蕩っている。小さい海月も、水面を揺蕩っている。なんだか、二匹とも楽しそうに見えた。

「物心ついた時、私は父が小説家だということを知った。今まで聞いてきた文豪や名作。父も彼らと同じ『物書き』であり、『名作を作り出す人間』なだと分かった時、私の

心は実に華やいだ。その頃だったはずだよ。私が、小説家を夢見たのは」

「それから数年後。小学六年生くらいの頃かな。父は私に、夢について語ってくれた。夢ってというのは、『海月の骨』なんだ、とね。父はそれだけ教えてくれたが、他には何も語ってくれなかった」

二匹の海月の距離が、少しだけ離れた。それでも二匹は、まだ楽しそうに見える。

「中学一年生になった私に、父はもう少しだけ語ってくれた。夢っていうのは、『海月の骨』みたいにあるはずのないものなんだ、と。私はそうは信じられなかったんだ。だって、私には、父のような小説家になりたいという夢があったからね」

二匹の海月の距離が、また離れた。

小さい海月が、やけに不安そうに見えた。

「私はもう少し父の話を聞いてみたかった。なぜ夢を『海月の骨』と形容するのか。そのわけを、もっと知りたかった」

「…でも、別れは突然だった。中学二年生の秋。父は、交通事故で亡くなった。人は呆気なく死ぬんだ。何の前触れもなく、命の火は消えるのさ」

二匹の海月が、離れ離れになった。水の流れに身を任せて、一つも抵抗することなく、水面を揺蕩っている。小さい海月が、物憂げに見えた。

「…それから、今まで。父が死んでから、私は、私の夢が分からなくなった。そして、気づいたのさ。私は、小説家になりたいんじゃない。父のようになりたいだけだった。父の影法師を追いかけるだけの、ただのコピー。それが、私という人間の正体だった」

大きい海月が波に流されて、どこかに消えた。小さい海月は、どうしようもなく、その場に揺蕩っている。

「父親のコピー、か」

「そう。私という人間は『模倣品』だった。父にどうしようもなく憧れて、話し方だって真似た。考え方だって、できる限り近づけようとした。でも、父がいなくなってから気づいたのさ。模倣する対象がないコピーは、もう進化することがないスクラップなんだ、って」

「じゃあ、あんたはあんたの意志で変わればいいじゃないか」

「…もう、分からないのさ。自分が何をしたいのかとか、自分の夢がどうか、将来がどうか。『私』という人格に、私はもう確証を持ってない」

か細い声で、彼女はそう言った。助けを求めているような、救いを求めているような、

そんな声だった。

「夢は失くしたんじゃない。大切だから見えてないだけなんだって、私は信じていたい。だから、星の王子さまは私にとって救いのさ。それがただの現実逃避だと頭では分かっている、ね」

また、哀しい顔をしている。諦めきったような微笑みが、俺の心を無性に揺さぶった。彼女を少しでも救えないだろうか。そんな傲慢な願いが脳裏によぎる。

「…あんたが言う『海月の骨』ってのは、あんた自身の夢のことだったんだな」

「…そう。私が失くした、夢のこと。どこを探しても、あるはずのないもの」

波の音だけが聞こえる。海月はいつの間にかどこかに消えて、夕日は海の果てに沈みかけている。

彼女は満足したようにこちらを向き、笑顔を作った。

「ありがとう。君が聞いてくれたおかげですつきりしたよ。今、私の心は実に晴れ晴れとしている」

「それ、嘘だろ」

直感に任せて、俺はそう言い放った。

「嘘じゃないさ。これでいいんだ。それと、明日はもう付き合ってもらわなくて大丈夫。

私たちの『海月の骨』探しは、これにて閉幕だ」

「…そりゃまた、なんで」

「だって、私が探す『海月の骨』は見つかるはずのないものだからね。あるはずのないものを探すってのは、無理難題が過ぎるだろう」

「でも」

「でも、じゃない。あるはずのないものなんだ。あつてはならない。存在してしまったら、おかしいんだ」

「あるかもしれないだろ。そんなの、探してみなきゃ分からない」

「——分かるよ。分かっちゃもうんだ。だって、これは現実逃避に過ぎないんだから。君を巻き込んでしまったこと、結構反省してるのさ。最後ぐらい、罪滅ぼしをさせておくれよ」

現実逃避でも、俺は彼女を肯定してあげたい。あんたは間違っていない。あんたはあんただろって、そう言ってあげたい。俺自身の醜いエゴだとは分かっていた。それでも、そのエゴを通じたかった。

「というわけで、明日はなしだ。私たちのひと夏のささやかな冒険は、今日でエンドロ

ールを迎えるのさ」

終わりにたくない。終わらせたくない。このまま終わらせちゃいけない。

「——待ってくれ。明日はなしでもいい。でも、今日はまだ終わってないだろ」
考えなんてなかった。どうすればいいかも分からなかった。

傲慢だと思った。迷惑かもしれないと思った。

それでも、俺は彼女を救いたかった。

「どこに行くんだい、君。もう真っ暗じゃないか」

スマホのライトで足元を照らしながら、遠い記憶を頼りに歩を進める。昔と景色が変わったようで、変わっていないような、そんな不思議な感覚がした。遠い記憶には霧がかかり、闇夜がそれを助長していたように思えた。

時刻は夜の十一時を回っていた。真夏とはいえさすがに辺りは暗く、少し空気が涼しく感じた。

「——あたらの森」

「あたらのよ？」

「そう。知らないのか？」

「知らないね。生憎、父はそんな言葉教えてくれなかったもので」

「…そうか」

川のせせらぎが聞こえた。確かに目には見えないのに、すぐそこにあると思った。そう確信できた。

目的地は、すぐそこだ。

「もう少しだ。そこに、あんたに見せたい景色がある」

ほんの少し間が空いて、彼女は答えた。

「——分かった。ついていくよ」

帰りの電車の中、俺は思考を巡らせていた。

彼女にかけるべき言葉は何か。

彼女にしてあげられることは何か。

残りの時間で、俺は彼女を救えるのだろうか。

今回ばかりは、考えなしに言葉を発した自分自身を憎んだ。これで何もできなかったら、俺は自分勝手に傲慢な人間ということになる。自分のエゴだけで行動し、結果何も成し得なかった、愚かな人間ということに。

こんな状況でも、俺は自分のことを案じてしまっている。

彼女のことを救いたい。それは本心のはずだ。少なくとも、俺は本心だと思っている。相反する二つの感情が、俺の心で揺らめいていた。

彼女を救いたい。

自分を守りたい。

そんな二つの思いが、風に揺れる蠟燭の火のように、まばゆく揺らめいていた。

「エゴ」という言葉で思い出したのは、自分の幼少の頃だった。

あの頃は何も考えず生きられた。

人に対する迷惑、誹り、周りの目、冷やかな空気。そういうことを気にせずいられたし、感じ取る能力もなかった。

夢や希望、期待、憧れ。そういうことを純真な気持ちで語れたし、現実を直視する能力もなかった。

——— そうか。案外、彼女に必要だったのは、そういう単純なことだったのかもしれない。

電車は静かに揺れながら、俺たちを運んで行った。車窓からは、仄かな月光が覗いている。

揺らいでいた俺の決意は、いつしか一つに定まっていた。

彼女を、救う。仄かでも、確かにそこにある月明かりに、そう誓った。

「——— ここだ」

遠い記憶にかかった靄は晴れなかった。それでも確かに、ここがその記憶の在処だと、俺の心が叫んでいた。

「ここが、あんたを連れていきたかった場所だ」

「…水辺？ さっきせせらぎが聞こえたし、浅瀬かな」

「ああ。昔はたまに来てたんだ、ここ。水がものすごく綺麗なんだよ」

「それはぜひ見てみたいものだが…生憎、真っ暗で何も見えない——」

その瞬間、淡い光が闇に瞬いた。一つ二つほどの、萌黄色もえぎの光だった。

「——蛍」

そう呟いた彼女は、ただ瞠目どうもくして、じっとその光を見つめていた。息をするように、蛍火は明滅し続けている。

「夏は夜」

思い出すように、懐かしむように、俺はそう言った。彼女は俺の方を向き、少し驚いた顔をしたあと、はにかむような笑顔を見せた。

「枕草子」

「そう。続きは？」

「月のころはさらなり、だね」

何も言わず、俺はただ頷いた。彼女の笑顔が見られたことが、少し嬉うれしかった。

「まさか、枕草子の再現をするために？ あれ、蛍が仄かに光って飛んでいるのが風流だ、って話だろう」

「となると、今から雨が降ってこないといけなくなるな」

「それは困ってしまうなあ。こんなところで雨になんか降られたら、風邪をひく以外に選択肢がない」

軽口を叩きながら、俺たちは蛍を眺め続けた。幻想的な光が、俺たち二人を酩酊めいていさせたような気さえした。

「…このまま、夜が明けなければいいのに」

不意に彼女が紡いだ言葉が、そのまま闇夜に溶ける気がした。俺はそれを丁寧ていねいに、一つずつ、拾い上げようとする。

「その気持ちのことだよ」

「え？」

「あたらよだよ。可惜夜あたらよ。明けてしまうのが惜しい、素晴らしい夜。それを可惜夜あたらよって言うんだ」

「可惜夜…」と、彼女は萌黄色の光を眺めながら呟いた。嚙かみ締めるような、儂ほかない声色だった。

「うん、いい響きだ」

彼女は優しく微笑んだ。

「そうだろう。俺も結構気に入ってるんだ」
耳を澄ますと、小さく木々のざわめきが聞こえた。川のせせらぎも、静かに響いている。

「…ここ、母親が連れてきてくれたんだ。記憶があやふやなぐらい、小さい頃」
靄がかかるぐらい、遠い過去の記憶。それでも、たしかに温かい記憶だと、心が覚えていた。

「枕草子とか、可惜夜とか、母親が教えてくれたんだ。海月の骨は、残念ながら教えてもらってなかったけどな」

「好きだったんだね、文学が」

「多分、な。俺はいつしか懂れていたよ。文芸部に入ったのも、そんな理由だ」

「…君、私に似てるんだね」

「…俺とあなたの違いは、たった一つだよ」

彼女の横顔は、螢火に弱く照らされ続けている。神妙に、ただただその光を見つめている。

「…あなたには、エゴがなかったんだ」

「…エゴ？」

「そう。でも、あなたは既に父親のコピーでもないし、スクラップでもない」

彼女は少しムツとしながら、俺の方を向いた。

「なんでそんなことが——」

「だって、あなたには感性があるだろう」

「——え」

彼女は目を大きく見開き、言葉を失ったようだった。

「夜が明けなければいい。そう思ったんだろう。それは、紛れもないあなたの感性だ。あなたの父親でもないし、可惜夜なんて言葉を作ったやつでもない。言葉っていうのは、物や気持ちに名前を付けているだけだ」

「それは…」

「言葉如きでは、全てを語ることはできないんだよ」

彼女は目を逸らし、口を噤んだ。

「それじゃあ、一つ質問だ。そこで彷徨さまよっている螢の光、どう思った？」

「…言葉には、できない。それぐらい美しいと、私は思った」

「そう、言葉なんて、その程度なんだよ。あなたは、言葉に縛られすぎていたんだ」

「…そうか。そうだったのか。『海月の骨』という言葉が、私の呪いだったわけだ」

悟ったような表情をした後、彼女は力なく笑った。

「…今まで、無駄な時間を過ごしてしまったな。もう少し、私自身のエゴに早く気付くべきだった」

「もう遅い、って意味か」

「そうさ。だって、私は今までずっと、そんな簡単なことに気付けなかったんだから」

「それは違う。だって、あなたは今までずっと、憧れに追いつこうとしていたんだろう」

「…え？」

「憧れは追いつくものじゃない。追い越すものだ。あなたは追いつく努力をしてきた。いくら誰かの模倣をしたからといって、あなたの感性が消え去る道理はない。あなたには、必ずあなたの感性がある。気持ちがある。思いがある。いつか、あなたにとっての『海月の骨』が見つかる。つまり、あなただけの夢だ。探さなくても、いつか絶対見つかるんだ」

「——だから。あなたは、あなたのままでいいんだ」

彼女はハッとしたような表情になって、淡い蛍の光の方を向いた。少しの間が空いて、ふふ、と笑い出した。

「——うん。そうだね。君の言う通りかもしれない。私は少々、難しく考えすぎていたらしい」

「この景色に抱く感情を、私自身の感性を、私は大切にすることにしよう。『海月の骨』を探すのは、今日でやめだ」

「でも——」

可惜夜の中、彼女は俺の方を向いて、美しく微笑んだ。

「もし見つけたなら、一番に君に教えるよ」

かくして、俺の三日間…いや、二日間は終わった。高校二年の夏。夢に悩む少年少女の、ささやかな冒険の話だ。(了)